

名称 | 人型の Dr. みんぱく

サイズ | 高さ 154cm

腰に腕を当てたスタイル、顔の形のディスプレイ、頭にはバンダナを巻いて人間らしい姿に成形されている

想像界の生物相

Dr. みんぱく

民博 名誉教授 久保 正敏



近年、AI（人工知能）を使うロボットが多数家庭に出現している。イヌ型や人型のはペット代わりの癒やし効果があるし、IT機器とのインターフェースとしても活用される。しかし、何といても日本における元祖は、手塚治虫の創造した鉄腕アトムだろう。

われわれ団塊の世代は、手塚治虫のマンガを読んで育った。SF、少女もの、青年もの、歴史もの、民俗もの、多様な作品群をとおして豊かな感性を育んだ。なかでも『鉄腕アトム』は、捨て子で孤児という出自の彼が、人間不信に陥り、ついには人間に敵対する、という展開を見せ、読者は仰天するとともに、アトムの生い立ちに共感し彼の悲しみに涙したものだ。

◆◆人間との距離◆◆

SF作家アイザック・アシモフが打ち立てた人間に従順たるべしという「ロボット三原則」に反して人間を支配下に置こうとするロボットへの不安は、多くのSF映画で繰り返し描かれてきた。その不安はフランクシユタイン・コンプレックス、すなわち、フランクシユタイン博士がいだいた、自分が創造した怪物に滅ぼされるといふ潜在的な恐れに基づいているようだ。しかし日本では、一九八〇年代から工場に導入した産業用ロボットを擬人化して愛称を付け

たように、ロボットを敵対視しない伝統があるというが、それは、人間に近い鉄腕アトムの存在があったからだろう。

想像界の生物には、不思議なもの、超自然的なもの、未知の世界の恐ろしいもの、人間が憧れる完全無欠なもの、人間の弱さや醜さを投影したものなどがありそうだが、鉄腕アトムも、それらすべてを具現化した存在なのかもしれない。

◆◆みんぱくのロボット◆◆

ここで紹介するのは「ものの広場」の主役だった「Dr.みんぱく」。当時の佐々木高明館長は、一九九三年に新設が認められた第七展示棟（現在の言語展示場、企画展示場、南アジア展示場のあたり）に情報展示を導入すべしと提言、検討されたさまざまなアイデアのなかから、「ものの広場」と「映像の広場」が一九九六年秋にオープンした。ともに実験展示であり、また使用機器の耐用年限を越えたため、前者は二〇〇五年、後者は二〇〇二年に姿を消した。「ものの広場」は、六台の長机に五二種類のモノが、

壁際の書架三台には四二種類の各国小学校低学年向け教科書が配置され、机の周囲に置かれた人型端末（右写真）二一台と壁際に置かれた秤型端末三台は、ともに「Dr.みんぱく」と名づけられた。観覧者がモノや教科書をもってDr.みんぱくのセンサーに

かざすと、それらに装着された感应型チップの記憶する識別番号が感知され、モノの名前や用途などの背景情報がDr.みんぱくの画面に提示されるほか、秤型端末は教科書を現地語で読みあげると同時にその和訳を逐次画面に表示する機能ももっていた。「ものの広場」は、視覚に偏重した博物館展示を見直して、触覚から始まるモノとの触れ合いを回復しようとする、新しい展示として企図されたものである。

この感应型チップは一九九〇年代に開発されたばかりの製品で、長さ二センチ、直径五ミリほどの大きな筒形だったが、その後、小型化したICタグや非接触ICカードへと進化した。IT機器の進化にともない、いずれ展示場にも、もっと人間味のあるロボットが出現するかも知れない。



工場の倉庫や作業場の雰囲気模した「ものの広場」。壁際に並ぶ教科書のあいだには、秤型のDr.みんぱくの姿も見える（1996年）